

安楽寺寺報

聞光

第50号
報恩講号
2009/2/15

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

個別性を大切に 信楽峻庵

かつて近代以前の日本の社会は、すべてが世襲主義の世の中でした。武士の子どもはどれほど能力がなくとも武士になれ、農家に生まれた子供は、その生涯を通じて、農業に生きていくほかに道はありませんでした。わずかな例外はあったとしても、古い封建時代の社会は、そういう世襲制度が徹底しておりました。

ところが近代、明治以降になると、そういう世襲制度が崩れて、今までの門閥や血統に関係なく、能力あるものは、いかなる地位にも昇ることができるといいます、能力主義の社会になっていきました。ことに近代の日本は富国強兵の路線をすすみましましたので、才能あるものは無一文から成

功して、巨万の富を築くものもあらわれましましたし、また軍隊に進んで、無名の家柄から陸軍大将、海軍大将という、輝かしい栄誉を身にうるものも生まれてきました。かくして近代以降は、能力主義が徹底していき、誰でも彼でも、みんなそれなりの夢をえがいて、懸命に努力するようになってきました。そしてそのような能力主義の徹底は、やがて厳しい競争社会を生みだすこととなりました。

ことにそのことは、戦後一般の生活水準が向上するにともない、高学歴社会が生まれてきますと、就職競争が激化し、その能力主義はますます深刻になってきました。ことに今日においては、このような競争原理が公教育や家庭教育の中にまで持ちこまれてきました。もともと教育というものには、競争原理はなじみません。人間の尊厳性が平等に保証

される環境の中においてこそ、子ども達は、はじめて多くの事を学ぶ事ができ、また人格的にも成長を上げていくことができるのです。今日さまざまな社会問題をおこす若者達を思うとき、このような競争原理の弊害が、その幼い魂に傷をつけたのではないかと考えずにはおられません。

これからの時代、世界は、そういう能力主義、競争原理によることなく、個別主義を大切にし、そしてそれぞれが異質のままにも共存、共生していくという、新しい原理を確立していくべきだと思えます。人間一人ひとりが、そしてそれぞれの組織が、そしてそれぞれの民族、国家が、その個別性を尊重され、それを発展させていくことが肝要です。かつて日本の政府が、規制緩和という美名のもとに、大企業を優遇して中小企業を軽視したこと、大資本の巨大マーケットを優先して個人商店を排除したことは、大きな錯誤でした。中小企業が元気になり各地の商店街が賑わってこそ、日本は豊かとなり、また私たちの生活も向上してくるので

も、どこかでは共存、共生する、これからの時代、世界とは、そうあるべきだと思ふことです。

昨年(二〇〇八)のノーベル化学賞を受賞された下村脩さんは、もっぱら光るクラゲ(オワンクラゲ)を八十五万匹も採集して、一人コツコツと研究を続け、ついに緑色蛍光たんぱく質を発見されて、生命科学の進展に大きく寄与されたわけですから、こういう個別的な基礎研究の重要性が改めて見なおされるところであります。

(二〇〇九・一・三)

よくいじつ
足もみ健康法 **足医術入門**
第2回 便秘の治し方

今回は便秘の治し方です。便秘に悩んでいる方は多いようです。薬にたよっている方もいるようですが、自分が薬にたよってばかりいると、人間の体もどンドンと薬にたよりだします。薬にたよらずとも、便秘は簡単に治ります。是非揉んでみてください。

揉む足診区(もむ場所)は大腸(特に上行結腸と下行結腸)と直腸

筋を揉んで下さい。右記の黒いところを少しほぐすように揉んでみて、ほぐれてくると痛いところが出てきます。その痛いところを揉みほぐしてください。

(1カ所2~30秒×数回)



安楽寺マンガ通信

信楽めぐみ作

① こんにちは。第3回安楽寺マンガ通信です。

今回は秋について

あはは 秋といえんば!!

② 食欲の秋♡

運動の秋

読書の秋

とかですかね。

③ 遊ぶの秋、このもいよいよねー

秋にかざらさず、いつも遊んでますよ!!

④ でも自分の秋探しも楽しいかも!!

そうなんです。皆さんはこの秋、何の秋にして実りあるものには、では、次号でお会いしましょう!!

安楽寺法座案内

一月	日時	1月16日(金) 昼席から 1月17日(土) 昼席まで
	講師	自坊 勤め
三月	日時	3月 5日(木) 昼席から 3月 6日(金) 昼席まで
	講師	島根 高林坊 橋本 明宣 先生
五月	日時	5月10日(日) 昼席から 5月11日(月) 昼席まで
	講師	福山 光明寺 吉岡 隆義 先生

因縁の教え

信楽晃仁

前回から「許し」と言うことを考えています。私の罪は誰が許し、許しによって罪から解放されるのか。そして今回もう一つ、人が人の罪を許すというのを考えてみたいのです。現代は特にその許すと言ったことができなくなった社会だと思います。

先日研修会でオウム真理教のドキュメンタリー映画「A」を見ました。監督の森達也さんがこられて、上映後、講演を頂きました。この「A」はオウム真理教の幹部が引き起こした様々な犯罪後、オウム真理教の内部から、オウム真理教の信者や、周りの状況を撮影したものでした。

この中にはオウム真理教は大変な事件を起こしたが、森監督は中に入ってみるとオウム信者も普通の人で「私たち以上にオウム信者は普通だった」と話されました。

森監督はいま日本のテレビや新聞をはじめとするメディアは、真実を伝えるのではなく、常に不安をおおるよう

を交えてお話し下さいました。しかし

自身は報道する者として、あるがままを、公平に報道しようとするような企画をしたところ、この番組はボツにされ、テレビ局も解雇されたそうです。

なぜかというところ、テレビ局は視聴率を稼がなくてはなりません。そのためには視聴者の期待を裏切ってはならない。その視聴者の思いは、オウムに関して言えば、オウム真理教は、極悪非道の集団か、あるいは浅原にマインドコントロールされて、ロボットのよう

に人間の心を失ったものの集団という報道でないと、視聴者の支持はないと言ったのだそうです。私たちとは違うと言ったことを、報道すること、視聴率は上がり、視聴者は安心し、団結を固くするのです。

共通の敵を想定し、それをみんなで断罪する、又みんなが他を非難し、断罪することで、自分たちの正義を確認し安心するのです。そのためにはターゲットが必要で、それをテレビは探しているようです。

人間の心理は常に自己防衛し、そして自己を持ち上げるためには他を批判し攻撃をするという性を持っているよ

うです。

さてその心情が強くなり現在の「クレーマー社会」となりました。何かあればすぐにクレーム(苦情・要求)をつける人ばかりになっていきます。それは学校のPTAであったり、病院の患者であったり、あるいは母親であったりと、それがいま、モンスターペアレント(親)やモンスターペイシェント(患者)、モンスターマザー(母)という怪物という言葉で冠して呼ばれるようになっていきます。

このような現代のクレーマー社会はこのような心理によると分析されます。強い動物は単独行動ができますが弱い動物は群れることで、危険を回避します。そして一緒に行動をすることで、自分の身を守ります。人間は弱いが故

に群れて暮らすようになりました。その弱い人間が群れ、知能が進んだことによって地球上で一番強い生き物になりました。しかしその群れて生きる習性は深く残っています。その群れは、みんな同じ方向に向かって走らなければ、群れは群れの意味をなしません。かたまると同じ方向に逃げなくては、群れる意味はないわけです。みんなが

同じでないと安心できない。自分と違うもの、自分たちと違うものは許せないわけです。

群れは、外に敵を作ると、団結が強くなります。その群れ同士の戦いが戦争です。その時、相手が悪で、こちらは善だという意識があれば、いよいよ団結は強くなり、攻撃の大義名分がつき攻撃がしやすくなります。戦争を、侵略戦争だという人と、防衛戦争だといった人は、戦争自体の是非をみるか、戦争に大義名分をつけて正当化するかどうかではないかと思えます。

そしてその私は善、相手は悪という意識は相手を断罪し攻撃するようになります。それがいま社会の中に充満しています。私は善だから相手を責める権利があると云わんばかりに、人の落ち度、人の罪は許せないのです。

しかし昔からそうだったわけではありません。現代人はどうして人の罪が許せなくなったのかと言ったことを考えてみると、それは昔に比べる罪の自覚がなくなったのです。一つに親鸞聖人はその罪を、どこかに罪悪深重の凡夫がいると言われるの

ではありません。罪悪深重はここに「親鸞一人がため」の言葉と受け取っていかれたのです。

数年前に前任職が聞光に書いておりました妙好人の足利源左さんの有名な逸話があります。京都の一灯園主、西田天香氏と対話したときのこと、西田天香氏は、みんなが堪忍しあうことの大切さをお話しされました。すると源左さんは、「おらには、みなさんが

ミドルエイジクラブ改め

「安楽寺友の会」(新名称)

昨年七月より始まりましたミドルエイジクラブが、先月第一五回を迎えました。その間色々な意見を頂戴しましたが、名称の問題が一番大きかったかと思えます。

「ミドルエイジクラブ」という名称が何の会かよくわからぬ。「説明がしにくい」という意見があがっておりしたので「意見を受け止めまして、新しい名前に変更いたしました。わかりやすい名称に変わりましたので、是非皆様のご参加をお待ちしております。

堪忍してくださいませで、する堪忍はありませぬのや」といわれたといひます。

する堪忍も大切ですが、その前に堪忍されて生きている私に気づくことが真宗の肝要ではないか。そこに真の許しがあるのではないかと思っております。

聖典講座、赤本終了。

先月第四三回目の聖典講座を開

催し、第一回の平成一三年の四月一〇日から七年半の歳月をかけて赤い御経本を全て前任職が解説いたしました。近頃は毎回百名程の御同行がお集まり下さり、大変にぎやかに開催できました。延々四千名ほどの御同行がお聴聞下さったことを大変有り難く思います。

次は四十八願文を前任職がお話しいたします。仏さまの願いを聞いてまいりたいと思ひます。皆様是非ご参加下さい。

仏事の心

初詣は神社にお参りなせよ

お正月になると、毎年、お正月の方が初詣に出かけます。テレビでは、あちこちの有名な神社の参拝風景を中継し、また、どこそこの神社に何人の参拝者があったかなどを報道したりします。これを見ても明らかのように、どうも、初詣と言えは、神社にお参りする人が圧倒的に多いようです。

実は、私のお寺でも、正月には修正会のお勤めをしており、「初詣にはお寺にお越し下さい」と呼びかけているのですが、残念ながらお参りの人は少なく、門徒の方でもなぜか神社へお参りされます。

それでは、どういう思いで初詣に出かけるのかと言うと、レジャー気分や雰囲気もあるでしょうが、中身は、「願いごとをする」のが多いのではないのでしょうか。「とし一年、健康でありますように」とか「仕事、事業がうまくいきますように」とか「た類の願いをかけるのでしよう。初詣」という言葉から連想される

のは、以上のように「神社」「願ひごと」となってきました。

しかし、初詣は「新年の初参り」ということですから、やはり、自らの信じるみ教えに則して、その宗教施設にお参りするのが本筋ではないでしょうか。ご門徒であれば、当然のこと、所属のお寺なり、ご本山にお参りすることです。

ただでさえ、己れの欲望や願ひばかりが前面に出がちな私たちです。心改まるお正月なのですから、じっくりと我が身を振り返り、人生にとって何が大切かを見つめながら、確かな依り所となるお念仏を味わってまいりましょう。それでこそ、門徒の初詣、です。

